

# 新聖堂成聖式 『神現聖堂』

## 準備

『大聖事経』の記述による

教会が完成したら、主教は前日までに使節を派遣し成聖の準備をする。至聖所のみならず、教会全体について準備を行う。特に宝座（聖なるテーブル）、四本の柱、不朽体を治める収納部分のある5本目の柱を中央に設置。収納部分は宝座の天板の真下で、高さ約35センチ。宝座の大きさは高さ約1メートル。幅奥行きは至聖所の大きさに合わせる。四本の柱の上部にはミツロウのパテを入れるための1センチほどの穴（英文では数インチ）、柱の下から10センチほどの所にヒモをひっかけるための刻み目柱の上部にも同様に刻み目をつける。天板の四隅は、釘の頭がでないように、あらかじめへこみを作っておく。釘がまっすぐはいるように、柱頭にもあらかじめ穴をあけておく。



**必要品** 宝座のため、釘4本、釘を打つための石4コ、宝座と奉献台の覆い（下衣、白）、宝座を縛るヒモ（約40m）、宝座と奉献台の上覆い（インディティア）、と、奉献台と宝座をおおうカバー、大気、天板をみがく布巾、王門のカーテン、イリティオン2枚、バラ水と教会用ワインを入れるガラス容器、聖水を撒くスプリンクラー（アスペルギルス）、聖膏、竿、スポンジ4コ（宝座天板をぬぐうため）、アンティミンス用スポンジ、ポテイル用スポンジ、宝座の下に設置する不朽体を入れる小さな鉛の入れ物、主教のための細いロウソク、他の神品信徒に配るための細いロウソク、乳香（最上級のと普通の）、大ロウソク2本（十字行用）、凱旋旗、その他。聖堂の周囲を清掃。

宝座の柱上から天板を外し、右側の側面におく。柱の上に置く位置をあらかじめ記しておく。

王門前にテーブルを置き、テーブルクロスをかけ、聖福音経と十字架、ほかの聖器物、スプーン、ほう、Altar Cloth、大気、ヒモ、聖卓と奉献台のカバー、釘、スポンジなどを置く。Altar cloth（宝座覆い）で覆い、燭台を四隅に置く。

至聖所内、主教座の近くにもうひとつ小さなテーブルを置き、Altar clothをかけ、聖膏、教会用ワイン、バラ水をいれた容器、竿、スプリンクラー（聖水を撒くもの）、石を置く。

不朽体をデイスコスの上に置き、星架と大気で覆う。成聖式の前の晩、王門の右側、救世主のイコンの前のアナロイ上に置く。至聖所の外で主教の指名した者が「献堂の徹夜禱」を行う。小聖水式を行う前に、うやうやしく近隣教会へと運び出す。早朝の聖体礼儀のあと、宝座の上、通常福音経の置かれる場所に設置する。福音経は不朽体の東側に置き、不朽体の前に燭台を置く。近くに教会がない場合は、アナロイの上に置いたままにする。

### 晩禱の終わった後、宝座からイコノスタス救世主イコンの前に移動、安置

#### ミツロウのパテについて。

主教の到着する前日の朝、ミツロウパテを作る。ミツロウ、細かい樹脂 wax-mastic (樹脂がない場合は白い乳香で代用)、ground incense 特別の乳香(エニシダの木へ1列王記19:4からとった)、つぶしたアロエ(アロエがない場合は、硫黄で代用)。ミツロウを新しいポットに入れ、他のものを用意した場所の反対側に置く。ミツロウが暖まったら、上記の者をポットに入れ、沸騰しないように棒でぐるぐるかきまわす。沸騰したら、しばらく置いて、ポットを火から下ろしておく。



## 成 聖 式

### ○入堂式

聖体礼儀の時間が近づき、主教は成聖されるべき聖堂に入堂する。

1. 到着、
2. 聖堂の門の前で主教を出迎え、パンと塩「日の出るところより」歌う。
3. 責任司祭十字架を盆に載せて出迎え
4. 輔祭「睿智」、聖歌隊、入堂の歌（常に福）を歌う。
5. トンデスポティン
6. 主教着装、歌（「爾の霊は・・・」）
7. トンデスポティン（着装が終わったら）

主教は主教の祭服をすべて付け、祭服の上からスラキツァ（特別の白い服、エプロン）または麻布をつける。整ったら至聖所に入る。陪祷する司祭も同様のエプロンをつけ、必要品の載ったテーブルを主教の右側に運ぶ。主教は王門を通るとき、杖を副輔祭に渡し、至聖所に入る。★ポドヴォリエでは奉献台の成聖は宝座の成聖が始まる前に済ませていた。

王門が開かれたら、信徒は至聖所を出る。

### ○宝座の成聖

主教は祈ったあと、両サイドの陪祷者に十字を描く。このとき輔祭は聖水を主教に持ってくる。主教はヒソップを取って、柱に聖水をかける。サクリスタン（聖具係）がミツロウパテを持ってくる。ミツロウパテに聖水をかける。ミツロウパテの入れ物を取り、柱に十字型に、いっぱいになるまで注ぐ。入れ物をサクリスタン（聖具係）に渡し、柱に聖水をかける。ワックスパテを早く冷やすため。終わったたら

輔祭 主に祷らん。



司祭 主憐れめよ

主教 主、神、我が救世主、人類を救うが為に万事を成し、及び行うの主よ、我等爾の当たらざる諸僕の祈祷を入れて、我等に今、定罪せらるるなく、爾を讃揚するが為に「聖なる神現」の名によりて造られし此の堂を成聖し、及びここに宝座を立てるに堪えるものとならしめ給へ。(高声) 蓋、およそ光榮、尊貴、伏拝は爾、父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

司祭 アミン。

司祭等は天板を運び、主教は両側から聖水をかけ、宝座の柱の上にセットする。

同時進行、聖所では【144 聖詠歌②】

我が神、我が王よ、我爾を尊み……、

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世世に  
司祭 アミン。

聖所、続けて【第22 聖詠歌①】

主は我の牧者なり、我萬事に乏しからざらん。……

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世世に  
司祭 アミン



サクリスタン（聖具係）は釘を運び、宝座の上に置く。主教は聖水をかける。柱の位置に釘を置く。サクリスタン（聖具係）は石ハ個を持ってくる。主教は一つ取って、ほかの神品が残りを取り、宝座釘を打ち付けての天板を固定する。習慣として、石は宝座の下に置く。ミツロウを注ぐ。天板にあふれたミツロウをきれいにこそげとる。

王門の前にすばやく絨毯を敷き、オルレツを敷く。王門開く。主教は至聖所を出て、オルレツの上に立ち、長司祭が唱える。

輔祭 我等またまた膝を屈めて主に禱らん。

（諸司祭ひざまずく）（聖堂内の信徒もひざまずく）

司祭 主憐れめ、主憐れめ、主憐めよ。

主教はオルレツの上に跪き、祝文を大きな声で唱える。（司祭、輔祭、至聖所内の神品も跪く）**習慣的に、この祝文は会衆の方を向いて唱える。**

主教：無限にして永存なる神、万物を無より有となし、近づき難き光に居り、天を以て宝座となし、地を以て足台となし、モイセイに命令と書式とを与へ、ヴェセレイルに智慧の神を容れて、彼等を奉事の条例たる真理の表式と預象を含有せし、證詞の幕を造るに堪ふる者となし、ソロモンに心の廣潤包大なるを賜ひ、彼を以て古の聖堂を興し、聖にして讚美たる諸使徒に聖神に於けるの奉事と真理の幕の恩寵を新たにし、

彼等に依りて爾の聖なる教会と爾の祭台を全地に植え付け、以て爾に聖せられし無血祭を献ぜしめて、今、また、





この堂の「ハリストスの神現」の名により、爾と爾の独生子と、爾の至聖神の光栄の為に造らるるを喜べる萬軍の主よ、親ら不死にして大恩を賜ふの王よ、爾の鴻恩めぐみと爾の慈憐あわれみを記憶せよ。蓋、是れ永遠よりあるなり。我等多くの罪に汚れし者を厭う勿れ。又我等の不浄によりて爾の約を破る勿れ。乃、今も我等の罪過を問はずして、我等を堅固にし、我等を爾が生命を施す聖神の恩寵と降臨によって、定罪なくして、この堂を新開し、及び此の内にある祭台を成聖するに堪ふる者となし、此の上に於いても聖詠と歌頌と機密の奉事とを以て、爾を讚美し、及び常に爾の慈憐を讚揚せしめ給へ。嗚呼、主宰、主、我が神、地の四極の恃みよ、我等罪人、爾に禱る者に聴きて、叩拝せらるる爾が全能の至聖神を遣わして、此の堂と、此の祭台を成聖し、此れに爾が永存の光を充て、此を擇びて爾の居所となし、此れを爾が光栄の住居の處となし、此れを爾が神聖なる上天の恩賜にて飾り、此を颶風に遭ふ者の湊みなと、諸愆いやしの醫、弱き者の避所、悪魔の禦ふせきとなし給え。願くは爾の目は日夜、之が為に開け、爾の耳は畏れと慎を以て此に入り、至尊にして伏拝せらるる爾の名を呼ぶ者の祈禱を聴き、彼等が爾に願ふ事は、爾、上天に於いて、之を納れ、慈恵を行いて仁慈なる主となり給へ。これを世の終わる迄、動きなく守り、此の裏にある祭台を爾が聖神の能力と行為にて至聖なる者となし、これを榮すること法律に由るの潔淨所に踰え、この上に行うの聖務は、爾の聖なる天上の無形の祭台に登りて、我等に爾の潔淨なる、蔽護へいごの恩寵を降す者と為し給え。蓋我等の恃むところは我が手の務めにあらずして、乃爾の言い難き仁慈なり。

祝文が終わると主教は立ち上がり至聖所の宝座の前へ。(王門、閉じる) 長輔祭は至聖所内で唱える。

【大連禱】※「主憐れめよ」も神品が歌う。

輔祭 神や爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐れみ護れよ。

司祭 主憐れめよ、

輔祭 上より降る安和と我等が靈の救いの為に主に禱らん。

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立及び衆人の合一の為に主に禱らん。

輔祭 尊貴なる我等の東京の大主教、全日本の府主教ダニイル及び尊貴なる仙台の主教セラフイム並びに其の手の行く所、及びこれと共にする諸司祭、諸輔祭の為に主に禱らん。

輔祭 この聖堂、及びその内にあるこの祭台の聖神の降臨と能力にて聖せらるるが為に主に禱らん。

輔祭 わが国の天皇、及び国を司る者の為に主に禱らん。

輔祭 この町とおよその町と地方、及び信を以てこの中に居る者の為に主に禱らん。

輔祭 我等諸々の憂愁と忿怒りと危難とを免るるが為に主に禱らん。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身を以て並びに悉くの我等の生命を以てハリストス、神に委託せん。

司祭 主爾に

主教 蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦を受けし尊貴なる致命者の上に息ふ、我等、光榮を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に

司祭 アミン。

サクリスタンはお湯を入れたピッチャー、赤ワイン、バラ水を主教の所に運ぶ。長輔祭唱える。

輔祭 主に禱らん。

司祭 主憐れめよ。

主教は、頭を屈めて、お湯とワインの上で黙唱。(★以下大連禱と同時進行)

主教 主我が神、爾が救いを為すの現あらわれにてイオルダンの流れを聖にせし者よ、今も親ら  
爾が聖神の恩寵を遺はし、此の諸水と酒に福を降して、之を爾の祭台を成聖全備するも  
のとなし給へ。蓋、爾は世世に崇め讃めらる。アミン。

主教 『父及び子及び聖神の名によりてなり、アミン』と、湯を3度宝座にかける。(★かなりたつぷり)

★スポンジを持ってきてお湯ですみずみまで洗う。下にこぼれた湯はタオルでぬぐい、スポンジとともに洗い桶で回収。

主教、ワインとバラ水を一つの容器に混ぜる。

同時進行、聖所、大連禱が終わったら【第88聖詠歌う唱える】宝座を洗う間。

萬軍ばんぐんの主しゅよ、爾なんじの住所すまいは何なんぞ愛あいすべき……。

主教、宝座を洗い、拭った後に誦す。

主教 光荣は我等の神に世世に帰す。





司祭 アミン。

主教、バラ水と赤ワインを混ぜたものを、3度宝座に十字形に注ぐ。司祭等と共に手で、宝座全面にたっぷり塗りこむ。かけるたびに、五十聖詠の句を唱える。

主教 イソップを以て我に沃げ、しかせば我潔くならん。我を洗え、然せば我雪より白くならん。

聖所【第50聖詠 101-21 歌う】

われ よろこび たのしみ  
我に 喜 と 樂 とを聞かせ給へ、……

へポドヴォリエンサクリスタンは白布(ハンカチ大)を運ぶ。主教1枚取り、残りは諸司祭に渡す。宝座をぬぐう。

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

司祭 アミン。

サクリスタンは聖膏を持つてくる。主教は筆を執り、宝座の上に十字型に塗る。

天板の上に2箇所、一つは福音経を立てる位置、ディスコス、ポテイルを置く位置。  
長輔祭、塗るたびに



輔祭 謹みて聴くべし<sup>つし</sup>  
神品『アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ』

宝座の柱の四面、およびその角にも塗る。  
柱の両サイド、中央、角に塗る。

同時進行、聖所【第132聖詠】聖膏で宝座を成聖する時歌う

けいていむつま お ぜん かな  
兄弟 睦 しく居るは、善なる哉……、

主教 聖三者、我らの神よ、光栄は爾に帰す

司祭 アミン、

司祭等は宝座の下覆い（スラチツァ・白布）を運ぶ。主教は裏表面に聖水をかけ、司祭等は宝座にかぶせる。ひもを持ってきて縛る。主教はひもに聖水をかける。以下のような方法でしぼる。

各面にヒモで十字形が描かれるようにする。

主教は右面の最初の柱の側に立ち、ヒモ端を押さえる（長さ約メートルくらい）。（司祭等は）残りのヒモを持って②の柱に向かう。（反時計回り）

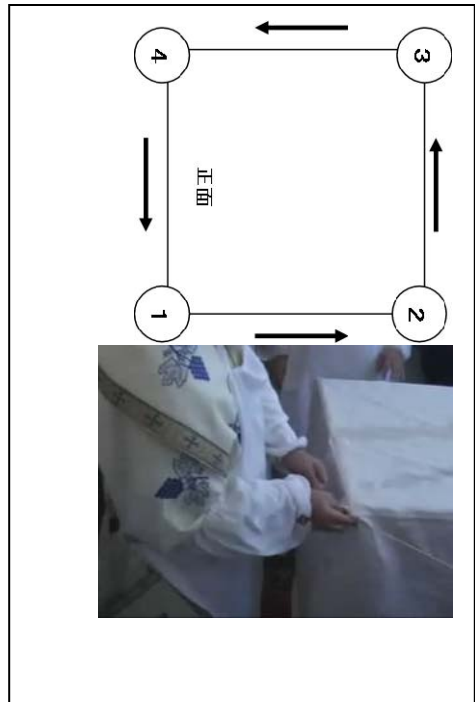
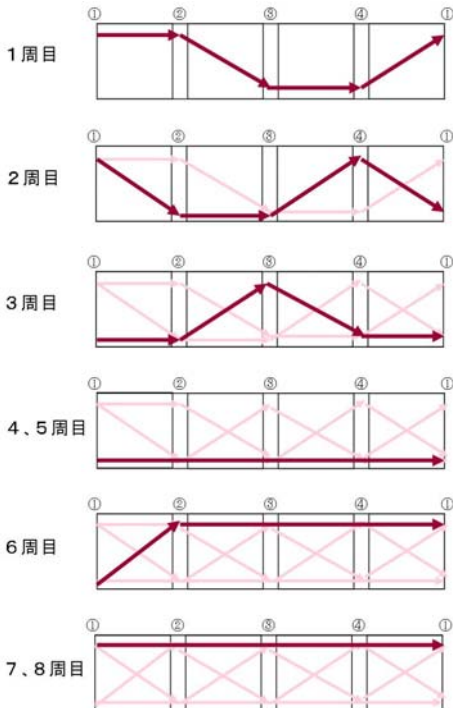
1 Bohem、「心を附けよ」となっていたが、現行の「謹みて聴くべし」に変更。



- 1周目 ①の上から②の上 ③の下 ④の下、①の上 端を結ぶ
- 2周目 ②の下、③の下 ④の上、①の下、正面に十字形
- 3周目 ②の下③の上、東面に十字形、④の下、北面に十字形、①の下、
- 4、5周目 下部を二重に巻く（通算三重巻になる）
- 6、7周目 ②の上、南面に十字形、上を三重巻にする。①の上で端と結び合わせる。（★しっかりと結ぶ。最初の端と合わせて封印）

同時進行聖所【第二聖詠】を歌う。宝座をヒモで縛る時

主よ、<sup>しゆ</sup>ダワイドと其<sup>そのことごと</sup>悉く<sup>うれい</sup>の憂<sup>うれい</sup>とを記憶<sup>きおく</sup>せよ。……



主教 光栄は我等の神に世世に帰す

司祭等、宝座の上インデイチヤ衣を用意し、主教聖水で表裏を潔める。宝座に衣せる。その上にイリトンをかけ、アンティミンスを置く。宝座には聖福音経、十字架を置く。袱を以て宝座を被う。各諸品を聖水で潔める。

同時進行聖所【第88聖詠】を歌う

主は王たり、彼は威嚴を衣たり……、

(王門が開くまで繰り返す、開いたららる聖詠)

主教 我等の神は常に崇め讃めらる、今も何時も世世に

司祭 アミン。

第一位の司祭に命じて奉献台の衣を聖水で潔め(ポドヴォリエでは宝座の前にすませていた)、デイスコス、ポティール、大気、小袱なども用意し、Altar clothをかぶせるその後、主教、司祭は白いエプロンを脱ぐ。

王門を開く。



○至聖所、聖所の成聖（炉儀、聖膏で十字を描く）

長司祭が主教に香炉を手渡し、炉儀。宝座、奉献台、至聖所内。長輔祭はロウソクを持って先導。全堂も同様に行う。主教が炉儀するとき、掌院二人（または典院、司祭）、が続ぎ、一人は聖水をかけ、一人は聖膏を竿の先の筆につけて、十字を描く。最初は至聖所内、高座の窓の上、教会の西門、南面つづいて来た面の門または窓の上。高さが高いときは台または長い竿を用いる。主教は至聖所に戻る。

【第25聖詠を繰り返す】 主教の炉儀終わるまで。

主よ、我を判き給へ……、

主教 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

長輔祭は主教から香炉を取り、 $\infty$ 度主教に炉儀、宝座の前に炉儀。主教の左横で小連禱。

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 神や爾の恩寵を以て我等を助け救い憐れみ護れよ。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身を以て並びに悉く



（長輔祭が点灯したロウソクを持つ。聖事経の後代の注意書きによれば、このときまで至聖所に明かりは灯さず、長輔祭のロウソクは前日の徹夜禱の前に灯した宝座の四隅に置いたロウソクから取る。成聖式が始まると、司祭たちによってテーブルが至聖所に運び込まれ、この4つのロウソク立てはイコノスタスのアイコンの前に置かれる。）

の我等の生命を以てハリストス、神に委託せん。

詠隊 主爾に

主教 「祝文」 天地の主、言い難き智慧を以て爾の聖なる教会を建て、天に於ける諸神使の奉事に象りて、地に神品の班位を設けし者よ、爾大恩を賜ふの主宰よ、今も我等祈祷する者を受け給え、これ我がこれらの事を願うに堪うる者たるに非ず、即ち爾が仁慈の秀絶の著わるるが為なり。蓋爾、多方を以て人類に恩を施すを息めず、爾が賜ひし所の諸恩の首は、即ち爾の独生子が肉体を以て来たるにあり。彼は地に顕われ、暗きに居る者に救の光を照し、己を祭として我等の為に献

じ、全世界に浄むる者となり、我等を其の復活に興る者となし、天に升りてかつて約せしが如く、其の門徒と使徒に衣するに 上よりの力、即ち伏拝せらるる全能の聖神、爾、神・父より出ずる者を以てせり。是に縁りて彼等は行と言に有能なる者となり、子となすの洗礼を伝え、諸教会を興し、諸祭台を立て、神職の規程と法律を定めり、我等罪人彼等の傳を守りて、爾永遠の神に俯伏し、爾仁慈なる者に捧る、爾を讃詠するが為に造られし、此の聖堂に爾が神聖の光荣を満て、この中に建てられたる祭台を至聖所となして我等が爾の国の畏るべき宝座の前に立つが如く、其の前に立ち、定罪なく奉事して、爾に我等及び衆人の為に祈祷を捧げ、爾の仁慈に無血祭を献じて、自由と不自由の諸罪の赦免、生命の良途、行為の善進、衆義の確守を得る者となるを得せしめ給へ。

(高声) 蓋、爾父と子と聖神の至聖なる名は崇め讃めらる、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

主教 衆人に平安



詠隊 爾の神にも

輔祭 爾等の首を主に屈めよ。

詠隊 主、爾に

主教 「黙唱祝文」主、万軍の神よ、我等爾に感謝す。蓋爾は聖なる使徒及び我が克肖なる諸神父に注ぎたる恩寵を爾の大いなる仁愛によりて、我等不当なる爾の罪僕にも及ぼすを喜べり。仁慈なる主宰よ、爾に禱る、この祭台に光栄と神聖と恩寵を満てて、其の上に爾に献ぐる所の無血祭品の爾の独生子、主、神、我が救世主イエイス・ハリストスの至浄の体、至尊の血に変化して爾の衆人と我等不当の者との救いを成すを得せしめ給え。

(高声) 蓋、爾は我等の旅我等を憐れみて救うの神なり、我等光栄を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

主教 平安にして出ずべし

祝文の終わりに、主教にロウソクと、まだ点火していない細いロウソクが渡され、主教みずからに点灯し、宝座の後ろの高座に立つ。(注：成聖式中、この時までロウソクを点火しない。)

○十字行と不朽体の嵌入 ※不朽体を近隣の教会まで取りに行かない場合)

成聖する聖堂の近くに他の聖堂が無い場合、不朽体は前晩より本堂の内、王門、右側の救世主の聖像の前に台を設けて安置する。



主教は王門を出て、不朽体の前にオルレツを敷いて立ち、祈り陪禱者に降福。不朽体に3回炉儀。

【トロパリ4調】歌う。

ハリストス神よ、全世界にある爾が致命者の血にて、紅の美服の如く飾られたる爾の教会は、彼らを以て爾に呼ぶ、爾の民に恩澤を降し、爾の住居に平安を与え、我等の靈に大なる憐みを垂れ給え。<sup>3</sup>

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世にアミン

【コンダク8調】

主よ、全世界は捧神なる致命者を、萬物の初実<sup>はつもの</sup>として、爾萬物を植え附けし者に奉る。大仁慈なる者よ、彼等及び生神女の祈禱に依りて爾の住所<sup>すまい</sup>なる爾の教会を深き平安に守り給え。<sup>4</sup>



【小連禱】<sup>5</sup>

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 神や爾の恩寵をもって我等を助け救い憐れみ護れよ。

<sup>3</sup> (原文)「ハリストス神よ、爾の教会は全世界に爾が致命者の血にて、<sup>3</sup>縫袍臬布<sup>3</sup>美しき紫布の如く飾られ、彼らを以て爾に呼ぶ爾の民に爾の鴻恩を降し、爾の住居に平安を与え、我等の靈に大なる憐みを垂れ給え」衆聖人の主曰、致命者のトロパリと同じなので、入れ替えた。Иже во всем мире мученик Твоих, яко багряницею и виссою, кровью Церковь Твою украсившица, теми вопиет Ти, Христе Боже: людием Твоим шедшоты Твоему даруй и душам нашим велию милость.

<sup>4</sup> (原文)「主よ、全世界は捧神なる致命者を万物の初実として、爾万物を植え附けし者に奉る。大仁慈なる主よ、彼らと生神女の祈禱に依りて爾の住所なる爾の教会を深き平安に守り給え。」衆聖人の主曰コンダクと同じにつき入れ替え。

<sup>5</sup> 明治の祈禱書には諸司祭が「主、憐れめよ」を唱えるようになっていたが、ロシアのテキストに従って、聖歌隊が歌うことにした。



詠隊 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身をもつて並びにことごとくの我等の生命をもつてハリストス、神に委託せん。

詠隊 主爾に、

主教、蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦しみを受けし尊貴なる致命者の上に息う、我ら爾、父と子と聖神に光榮を献ず、今も何時も世世に。

詠隊 アミン

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我らを隣めよ。(3回)

輔祭 主に祈らん。

詠隊 主憐れめよ。

主教 【祝文】爾の言に誠なる爾の約にいひわち、無き主、我が神、爾の聖なる致命者に善戦を戦ひ、敬虔のちしめう馳驟の程をつくし、真実の承認の信を守るを賜いし至聖なる主宰よ、爾親ら彼等の祈禱を聴き納れて、我等不当なる爾の僕に彼等と共に分与と嗣業を有たした我等は、彼等になら倣ふ者となりて、彼等が受けんとする幸福をも受くるに堪うることを得せしめ給え。

(高声)爾が独生子の慈憐と仁愛に依りてなり、爾は彼と至聖、至善にして生命を施すの爾の神としん偕に讚揚せらる、今も何時も世世に。

6. Господу, верному в словесах Своих и неложному (господи) в обещаниях, Который даровал святым Своим мученикам подвизаться добрым подвигом, совершить чтение (слова) благочестия и сохранить веру истинного исповедания, чтобы и недостойным рабам Своим Он дал участие в наследии с ними и сделал благодни их подражателями.

詠隊 アミン。

輔祭 爾の首を主に屈めよ。

詠隊 主爾に

主教 【祝文】 主我が神よ、至聖なる我が女宰、生神女と諸聖人の祈祷に依りて、我等不当なる爾が僕の手の工作わさを助けて、我等が万事に於て爾の仁愛を喜ばしむるに堪うるを得せしめ給へ。（高声）願くは爾、父と子と聖神の国の権柄は讃揚、讃栄せられん、今も何時も世世に。

詠隊 アミン。

【十字行】

主教 不朽体を載せるデイスコス、星架上の大気を覆うものを取り、これを両手で戴き、門より出る。

十字行の順序は凱旋旗、及び聖堂の聖像、聖歌隊、諸司祭、ロウソクを持つ者、杖を持つ者、其の中間にミトラ、長輔祭と輔祭は香炉で不朽体と主教に炉儀。輔祭はデイスコスの上にリピダ二本、（または四本）をかかげる。主教の前に、副輔祭はディキリ、トリキリを持つ。

【トロパリ第3調】 歌う

信の石に爾の教会を建てし仁慈の主よ、此の中に献ぐる我等の祈祷を助け、信を以て爾に向ひ、我が神よ、我等を救え、我等を救へと呼ぶ人々を受け給へ。

【第3調 第3歌頌】

主、爾を頼む者の固めよ、爾が尊き血にて獲たる教会を堅め給へ。』



『連接歌集のものに変更「爾を頼む者の固めとなるの主よ、爾が尊き血にて求めし教会を固め給え。（成聖式）から』

【第8調 第3歌頌】

主、天の穹蒼おおぞらの至上なる造成者、教会の建立者、冀望きぼうの極かぎり、信者の固かため、独人ひとりを愛する者よ、我を爾の愛に堅め給へ。<sup>8</sup>

【第5調 第3歌頌】

己の命にて虚しき處ところに地を固め、保ち難く重き者を懸けしハリストス、独仁慈にして人を愛する主よ、爾が誠めの動かざる石に爾の教会を堅く立て給へ。<sup>6</sup>

聖堂の外を回る。西門より始めて、南回りで東方に向かう。この時、一司祭先導して聖水を堂に撒き成聖して行く。

堂の門に来た時、聖歌隊は次のトロパリを歌う。門前にあらかじめテーブルをセットしておく。

【トロパリ 第7調】

聖なる致命者は、よく難を受けて栄冠をこうむる者、主に祈り給え。我が靈を救わん事を。(2回)

ハリストス神や、爾を讃揚す、使徒の誉れ、致命者の喜びよ、それらの教えは一体の三者なり。

主教、頭上より不朽体を載せるデイスコスを降ろし、聖堂の前に堂に用意した台に置き、三度伏拝し、ミトラを載ぎ、右左の諸司祭に降福する。聖歌隊はトロパリを歌い終わり、先に聖堂に入る。門を閉じる。(聖歌隊のみ中、主教等は外)。司祭等は



<sup>8</sup>天体を構造し、教会を建立せし主、希望の極、信者の固めなる独り人を慈む者よ、我を爾の愛に固め給へ。  
<sup>6</sup>己の詔にて虚しきに地を固め、保ち難く重き者を懸けしハリストス独り仁慈にして人を愛するの主よ、爾が誠の動かざる石に爾の教会を堅く立て給え

イコン、福音経、十字架を持って、扉の前で西向きに立つ。テーブルには覆い(altar cloth)をかけ、四隅(あるいは二本)ロウソクを立てる。輔祭、不朽体の上にリピダ(うちわ)をかかげる。長輔祭は香炉を主教に渡す。主教はそれを取り、デイスコスに一度炉儀。左右の福音経、十字架、左右のイコンと教役者に炉儀。長輔祭は香炉を受け取り、主教に向かって炉儀。

主教は不朽体の前で進み、

主教 ハリストス我等の神よ、爾は常に讃揚せらる、今も何時も世世に。

聖歌隊は聖堂の中から

詠隊 アミン。

主教 門よ、爾の首<sup>かしら</sup>を挙げよ、世世の戸よ、挙げられよ、光栄の王、入らんとす。

聖歌隊は聖堂の中から

詠隊 この光栄の王は誰ぞ。

主教はもう一度唱える。

主教 門よ、爾の首<sup>かしら</sup>を挙げよ、世世の戸よ、挙げられよ、光栄の王、入らんとす。

詠隊 この光栄の王は誰ぞ。

輔祭 主に祈らん。

詠隊 主憐れめよ。

主教ミトラをとって以下の祝文を唱える。



主教 永遠に讃揚せらるるの神、我が主、イイスス・ハリストスの父、其の子の肉体の幕を以て祝する者の住居と喜ぶ者の声と、有る所の天に録されし首生者の教会に入ること了我等の為に改め開きし仁慈なる主宰よ、祈る我等不当なる爾の罪僕、至聖なる爾の堂、即ち我が肉体、爾が讃美たる使徒パウエルを以て、爾の堂及び爾のハリストスの肢体と名付くるを喜びし者を象る此の「神現」の尊貴なる堂の新開を祝う者を顧み、此の堂を世の終わる迄、動きなく護り、此に於いて爾の光栄を顕し、我等に斯の中に於て爾と爾の独生子、我が主、イイスス・ハリストス及び爾の聖神に辱を得ずして、頌美讃詠を献ずるを得せしめ、智恵と心、及び爾を畏るるの畏れを以て、爾に伏拝する者を神聖の恩澤を蒙るに堪ふる者となし、我等及び爾が衆人の為に、爾の言い難き慈憐に捧ぐる此の祈りを、爾の仁愛に受けらるる者とならしめ給へ。至浄なる我が女宰、生神女永貞童女マリヤの祈祷に依りてなり。

(高声)蓋、爾は我が神、聖にして聖なる者の上に息ふ、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。

詠隊 アミン

主教 衆人に平安

詠隊 爾の神にも

輔祭 爾らの首を主に屈めよ。

詠隊 主爾に

主教 (聖入祝文黙唱) 主宰、主、我等の神、天に神使、神使首の品級の軍を立てて、爾が光栄の奉事者となせし者よ、求む、我等の入るに伴ふて、我等と偕に務め、爾の至善を讃栄する聖神使等の入るを致させ給え。(高声) 蓋、凡そ光栄、尊貴、伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に

詠隊 アミン。

続いて主教、不朽体を載せるデイスコスを取り、堂の門に向かい十字形を画して誦す。

主教 万軍の主、彼は光栄の王なり。

詠隊 万軍の主、彼は光栄の王なり。

聖歌隊が最後に歌う時、テーブルを脇に寄せ、主教は不朽体を載せたデイスコスを戴いて堂に入る。このとき聖歌隊トロパリ4調を歌う。

【トロパリ 4調】を歌う。

主よ、上の穹蒼そらの美しき如く、爾が光栄の下の聖なる住居すまいの美うつくしさを顕せり、万民の生命いのちと復活よ、是を世世に固め、常に此の中に於いて爾に献ぐるの祈禱を受け給へ。生神女によりてなり。

主教 王門より至聖所に入り、宝座を一度周回し、デイスコスに載せた不朽体を宝座に置き、不朽体に伏拝。ミトラをかぶる。長輔祭は主教に香炉を渡す。不朽体に3回、左右の陪禱者に炉儀。長輔祭は香炉を主教から受け取り、主教に向かつて3回炉儀。主教は祈禱し、陪禱者に降福。デイスコスから大気を取る。サクリストアンは聖膏と宝座の下に不朽体を入れるための箱を渡す。副輔祭は溶けた密ロウを運ぶ（少しさましておく）。主教はあらかじめロウで封印して紙に包んだ不朽体を紙より出し、小箱に納め、聖膏を塗り、その上に密ロウを注ぎ、サクリネ

タンに与える。主任司祭は主教の手に接吻し、小箱にフタをし、宝座の下中央の柱に安置。★ポドヴオリエの場合は、紙包みから不朽体を出し、聖膏を塗り、金属の小箱に詰めて、ニコライ神父に渡し、宝座の覆いをの下に手を伸ばし、宝座下中央の柱の中に安置した。

輔祭 主に祈らん。



10 好々美 Якоже вышняя тверди благочешие, / и нижнюю сподобил еси красотоу святаго селения славы Твоея Господи, / утверди сие во век века, / и прими наша в нем непрестанно приносима Тебе молитвения, Богородицею, / век Животе и Воскресение.

司祭 主憐れめよ。

主教 (祝文) 主我が神、爾の為に苦しみを受けし、聖なる致命者にその聖軀(不朽体)が全地に於いて、爾の聖堂に播かれ、<sup>いやし</sup>醫を施すの果を結ぶ光栄をも賜ひし主宰、親ら万福を施す者よ、爾が此の尊貴なる爾の祭台に安置するを喜べる聖軀の聖人の祈祷に因りて、我等を其の上に於いて、定罪なく爾に無血祭を献ぐるに堪うる者となし、我等が凡そ救いに務むるの願いを聴き納れ、爾の聖なる名の為に苦しみを受けし者に其の我が救いを助くるの奇跡を行うを以ても報い給え。

(高声)蓋、国と権能と光栄は、爾、父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に。

司祭 アミン。

長輔祭 我等、又々膝を屈めて主に祈らん。(主教、司祭、輔祭、聖堂にいる全員ひざまずく)

主教 主、我が神よ、爾一言を以て万物を造りて、其の存するを致し、言ひ難き多様を以て之を飾り、之を覆育する爾の神<sup>しん</sup>を用いて、日の光を注ぎて、之を養成し、爾の義人モイセイに感孚<sup>かんぷ</sup>して、爾の最と美しき造物に特種の誉れを賦せり。蓋、彼は爾、光を觀て善となし、之を昼と名付けたりと云へり。是を以て我等も、斯の至りて明なる日、毎日造物を養成する者を觀て、爾、真の日及び爾が暮れざるの光を讃揚す。爾は爾の独生子を以て、我等に我が性の爾が聖神によりて養成せらるるを戒め、此の恩賜によりて義人等日の如く輝くを致せり。我等爾に禱りて、爾、言、主、我が神の父に求む(蓋、爾の言い難き仁愛、爾の



量り難き怒憐に由りて、造物は古、彼の奇異なる棘、及び爾がシナイ山の現れ、及び證詞の幕、ならびに彼のソロモンの至りて美しき聖堂に於ける養成の法をも、新約の預象として受けり。仁慈の目を以て、我等不当なる爾の罪僕、今此の天に似たる室、地の誉れなる者の内、言い難き爾が光栄の眞の祭台の側に在る者を顧みて、爾の至聖神を我等及び爾の業に遣わし、聖ダヴィドの言ふ如く、正直き靈を我等の衷に改め、主宰たるの神を以て我等を固め給え。我が国を司る者に見ゆると見えざるの敵に勝つこと、及び我等衆人に協和と平安なるを賜ひ、爾を愛するによりて、務めて斯の堂を造り、及び此を成聖する者に罪の赦を与へ、彼等に凡の救に務むるを得せしめ、彼等を興して爾の誠を行わしめ、彼等に爾が聖神の恩賜の改新を授けて、定罪なく爾、惟一の眞の神、及び爾が遣わししイエス・ハリストスに伏拝せしめ給へ。至浄なる生神女（讚美たる聖使徒ペートル、パウエル）及び諸聖人の祈祷に依りてなり。アミン。

主教に続いて、全員立ちあがる。

長輔祭 神や爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐れみ護れよ。

詠隊 主憐れめよ。

輔祭 至聖、至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身、及び互いに各々の身をもつて並びにことごとくの我等の生命をもつてハリストス、神に委託せん。

詠隊 主爾に。

主教 蓋爾は我が神なり、聖にして爾の為に苦しみを受けし尊貴なる致命者の上に息ふ。我ら光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に

詠隊 アミン。



主教は権杖を取り、通常着装するところ（聖堂中央のカフェドラル）に行く。その場所がなければ至聖所前のアンボンの上。諸司祭はランクに従って左右に並ぶ。主教は祈り終わり、降福。

輔祭 神や、爾の大きいなる憐れみに困りて我等を憐れめよ、爾に祈る、聞き納れて憐れめよ。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

輔祭 又、我が国の天皇、及び国を司る者の為に祈る。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

輔祭 又、尊貴なる東京の大主教全日本の府主教ダニイル及び尊きなる仙台の主教セラフイム、及びハリストスに於ける、ことごとくの我等の兄弟の為に祈る。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

輔祭 又恒に記憶せれるる、この聖堂の建立者、及びすでに寝むりし、ことごとくの父祖兄弟、この所と諸方とに葬られたる正教の者の為に祈る。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

輔祭 又神の諸僕、我等の兄弟に慈憐、生命、平安、壮健、救護、春顧、寛宥、及び諸罪の赦しを賜わんが為に祈る。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

輔祭 又この至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此処に立ちて爾の大きいにして豊かなる憐れみを仰ぎ望む者の為に祈る。

詠隊 主憐れめよ。（3回）

主教 蓋、爾は仁慈にして人を愛するの神なり、我等光榮を爾、父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に。  
詠隊 アミン。



サクリスタンは十字架を盆に載せ主教のところに運ぶ。主教は十字架を取り同じ場所に立つ。十字架で、四方、東西南北を3回ずつ祝福。輔祭は十字架と反対側を炉儀。そのたびに唱える。

輔祭 衆人言うべし、主に禱らん

聖歌隊 主憐れめよ（四方に3回ずつ）

輔祭 睿智

主教はサクリスタンの持つ盆に十字架を置き、権杖を取り（もし装束所に立っているならば）至聖所の前のアンボンに進み、

主教 至聖なる生神女よ我等を救い給え。

詠隊 ヘルビムより尊く、セラフイムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生

みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。

主教 ハリストス神、我等の恃み、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

詠隊 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世に アミン。

主憐れめよ（3回）。福を降せ。

主教はソレヤに昇り、権杖を返し、十字架を取って、発放詞を誦する。

主教 【発放詞】

ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母の祈りと無形なる尊き天軍、光栄にして讃美たる聖使徒、「ハリストスの為にヴィフレエムに於いて、イロドに殺されたる一万四千人の聖嬰児」、使徒徒日本の大主教聖ニコライ、神品致命者京都の主教アンドロニク、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、



詠隊 アミン

終わると、輔祭は聖水を持ってくる。主教イソップで聖水を、至聖所、西方、ついで南、北方にそそぐ。主教十字架に接吻し、神品及び衆人に接吻させる。この時、各人に聖水をそそぐ。

★「いくとせも」を歌む。(「いくとせも」は聖体礼儀のあと)

時課を始める。

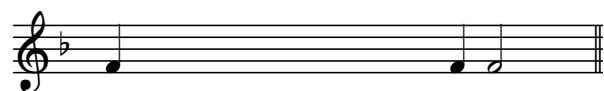
# 聖体礼儀

トロパリ、コンダクについて

- ① (神現) 聖堂のトロパリ、
- ② 成聖のトロパリ、
- ③ 「光榮は」コンダク：成聖の、
- ④ 最後のコンダクは「神品が歌う」

## 【神現聖堂のコンダク】

今も、コンダク「主よ、爾は…」  
下記の通り



今も、何時も世世に、アミン



爾、来たり、爾現れたま えり

【ポロキメン】（成聖の、及び神現の組み合わせ）

※注意 特別の形を取る。成聖のポロキメンを2回歌ったあと、神現のポロキメンを歌う。ポロキメンを二つ合体させた場合は誦経者と詠隊の「半句ずつ」は行わない。

輔祭 謹みて聴くべし、

主教 衆人に平安、

誦経 爾の神にも、

輔祭 睿智

誦経 ポロキメン

誦経 主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん（4調）

聖歌 主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん

誦経（句）主は王たり、彼は威厳を衣たり、主は能力を衣、また之を帯にせり

聖歌 主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん

誦経 主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。主は神なり、我等を照せり。

聖歌 主の名に依りて来る者は崇め讃めらる。主は神なり、我等を照せり。

【使徒経の読み】（成聖と神現と、二つの端<sup>レクシオン</sup>を一続きに読む。）

輔祭 睿智

誦経 聖使徒パウエルがエウレイ人に達する書の読み、

輔祭 謹みて聴くべし、

誦經 (使徒経を読む)

成聖の(エウレイ書307端)

聖なる兄弟、共に天の召に與る者よ、我等の承認の使徒及び司祭長たるイイススハリストス、彼を立てし者に忠信なること、モイセイが其全家に於けるが如くなる者を深く思へ。蓋彼が光榮を受くべきことの、モイセイに超ゆるは、家を造りし者の、家より尊きが如し。蓋凡の家は、之を造る者あり、惟萬有を造りし者は神なり。

(続けて)成聖の(テイト書302端)

兄弟よ、神の恩寵、衆人に救を施す者は現れて、我等に、不敬虔と世俗の慾とを離れて、自ら制し、義と敬虔とを以て今の世に生を度り、望む所の福、及び大なる神、我等の救主イイススハリストスの光榮の現を待つことを教ふ。彼は我等の為に己を與へたり、我等を凡の不法より贖ひて、己の為に選ばれたる民、善行に熱心なる者を潔めん為なり。爾此等を言ひ、此等を勧め、一切の権を以て責めよ、人をして爾を軽んぜしむる勿れ。爾彼等に、政を執る者及び権を有つ者に服し、且順ひ、凡の善行に己を備へ、人を謗らず、争はず、柔和にして、悉くの人に凡の溫柔を表さんことを、記念せしめよ。蓋我等も曩には愚なる者、順ばざる者、迷へる者、種種の慾と樂との奴隸たる者、怨恨娼疾を以て日を送りし者、悪むべき者又互に悪める者たりき。然れども我等の救主神の恩寵と仁愛との顕れし時、彼は我等が行ひし所の義の功に由るに非ず、乃己の慈憐に由りて、重生の洗、及び聖神の復新を以て、我等を救へり。聖神は、即神之をイイスス・ハリストス我等の救主に由りて、豊に我等に注げり、我等が彼の恩寵を以て義とせられて、望に循ひて、永遠の生命の嗣と為らん為なり。

【福音前のアリルヤ】

主教 爾に平安

誦經 爾の神にも、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、一調 歌う

誦經 彼の基は聖山に在り、主はシオンの門を愛すること、イアコフの悉くの住所にまされり。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

誦經 神の城邑よ、光榮は爾において伝えらる

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

### 【福音經の読み】

輔祭 君や、聖使徒及び福音者（イオアン）の福音を宣ぶる者に祝福せよ、

主教 願くは神、光榮にして讚美たる聖使徒及び福音者（イオアン）の祈禱によって、爾福音を宣ぶる者に多くの力ある言を賜はん、その至愛の子我が主イエススハリストスの福音の行るるが為なり。

輔祭 アミン、睿智、謹み立て、聖福音經を聴くべし

主教 衆人に平安

### (詠) 爾の神にも

輔祭 (イオアン) による聖福音經の読み (2つ続く場合は、最初の福音者の名前だけをあげる。)

輔祭 睿智、謹みて聴くべし。(福音經も使徒經同様、一続きに読む)

成聖の(イオアン)37端ななかば10:23-28

彼の時、イエルサリムあいらみのまつりに重修節あり、時方まに冬なり。イエスス殿に在りて、ソロモンの廊を歩めるに、イウデヤ人彼を環りて曰へり、爾何時までか我等を疑惑せしむる、爾ハリストスならば、明に我等に告げよ。イエスス彼

等に答へて曰へり、我爾等に告げたり、而して爾等信ぜず、我の我が父の名に因りて行ふ事は、我が為に證を作す。然れども爾等信ぜず、蓋爾等は我に属する羊に非ず、我が爾等に言ひしが如し。我が羊は我の聲を聴く、我は彼等を識り、彼等は我に従ふ。我は彼等に永遠の生命を與ふ

神現の(マトフェイ6端。)

イイスス、ガリレヤよりイオルダンに來り、イオアンに就きて、之より洗を受けんと欲す。イオアン彼を止めて曰く、我爾より洗を受くべきに、爾我に就くか。イイスス答へて彼に謂へり、今姑く許せ、蓋我等は是くの如く凡の義を尽すべし。是に於て之を許せり。イイスス洗を受けて、直に水より上れるに、視よ、天彼の為に開け、神の神鳩の如く降りて、其上に臨むを見たり、且天より声ありて云う、之は我の至愛の子、我が喜べる者なり。

【常に福】は通常の

【領聖詞】

「成聖」の

「神現」の

「主日領聖詞」子供たちが聖詠の句を唱える

参考資料

- ・日本語「聖堂成聖式」(大正2年9月名古屋、司祭ベトル柴山写)
- ・日本語「一関、成聖式」
- ・駐日ロシア教会、アレクサンドル・ネフスキー教会成聖式記録DVD(仙台教会)
- ・英語 Great Book of Need(大聖事経)
- ・ロシア語 Овящение храма архиепископом. Великое овящение(インターネット)

[http://www.liturg.ru/lav/tebivtebnik/6\\_tomah2.php#ps4](http://www.liturg.ru/lav/tebivtebnik/6_tomah2.php#ps4)

・ロシア語 Чин Освящения Храма в изложении для клироста Пенны